

「シニア世代×大学×ICT（情報通信技術）」が創る学びとは？

—東京都立大学プレミアム・カレッジの履修生を追いかけて—

伏木田稚子

あなたが仮に、コンピュータやインターネットの使い方に不安を感じているシニア世代だとして。「大学でICT（情報通信技術）を使いながら学んでみましょう」と言われたら、どのような気持ちになるだろうか。

「まったく自信がなく、おろおろしていました」70歳のYさんは2022年4月、ICTを活用した大学での生涯学習に付いて行けるのか、という憂いを口にした。その3か月半後、「少しずつ、パソコンは便利で面白い、と感じるようになった」と喜んだ。翌年2月には、「たくさんの宝物をいただきました。本当に世界が広がり、これから新しい自分をはじめたい」と心を弾ませる。

パソコンの基本操作がわからないと嘆いていたYさんは、約1年の間に何を学び得たのか。一人の大学教員として、シニア世代の生涯学習に携わる筆者のまなざしで、この問いに答えてみたい。

東京都立大学は2019年4月に、50歳以上が対象の「新たな学びと交流の場」として、プレミアム・カレッジを開講した。「首都・東京をフィールドに学ぶ」をテーマに、講義やフィールドワーク、ゼミナールといった多様なプログラムを提供する。江戸のまちづくりの歴史、水資源を支える都市基盤技術、多摩地域の自然、食生活と健康など、文理の枠にとらわれず、通年で探究学習に取り組む。

筆者は当初から、カレッジ生がICTを活用して自分の考えを相手に伝えるための、知識と技術を伝えてきた。冒頭のYさんが受講したのは、前期に行われる「パソコン技術」という授業で、数名の教員と学生チューターがパソコンに不慣れな履修生をサポートする。

2022年度は11名が参加し、授業の開始当初は、修了論文の作成やプレゼンテーションに不安を抱えていた。自らを「パソコン難民の高齢者」（Nさん）と呼び、「パワーポイントは見るのも聞くのも初めて」（Gさん）と戸惑いを隠せなかった。

大学でのパソコン利用に関する不安	人数
タイピング（キーボード入力と同義）	5
メールの送受信（添付ファイルの開け方、ファイルの添付方法を含む）	2
パソコンやアプリケーションソフトの起動・終了	4
パソコンを用いた修了論文の作成	7
成果発表会でのPowerPointによるプレゼンテーション	8

11名の履修生の大半が、大学でパソコンを使って学ぶことに不安を感じている



履修生は1人1台のコンピュータを使い、周囲と助け合いながら学ぶ

大前提としてカレッジ生は、教職員とメールでやり取りし、学術データベースの検索や Microsoft Office を用いて課題をこなす必要がある。しかし現在のシニア世代は、学校教育を通して体系的な情報教育を受けていない。職場での経験を除くと、パソコンやインターネットといった ICT（情報通信技術）に習熟する機会が、市区町村やカルチャースクール主催の市民講座に限られる。

こうした講座は一般的に、「パソコンが使えるようになる」状態を目指す。それに対し、大学での生涯学習は「パソコンを使って学ぶ」段階を見据える。プレミアム・カレッジにおいても、パソコンの活用はゴールではなく探究学習のツールに過ぎない。だからこそ、「パソコンがわからないと戸惑って自信をなくし、学習のネックになってしまう」（Yさん）のは悔しい。

くだんの「パソコン技術」の履修生は7月の授業終了時、「パソコンは苦手意識があったが、メンタルな部分は克服できた」（Sさん）と安堵に包まれた。共に学んだ仲間のプレゼンテーションからは、「テーマと主張の明確さ、スライドのレイアウトの活かし方、どれをとっても勉強になりました」（Gさん）と気づきを得る。シニア世代がわずか数か月で、パソコンへの不安を振り切り、学びに活用する意味を見出したことに心が震えた。

「わからないことがわかったと思えた時に、わくわく感やうれしさを感じられたのは大きな財産」と語ったYさん。4月に抱いていた不安は9月頃から薄れたと言い、翌年の2月、「これからの自分の人生に、有意義な時間と少しの自信をありがとうございました」と結んだ。

学ぶことは楽しい。そのシンプルで本質的な学びの価値を、シニア世代×大学×ICT（情報通信技術）が創り、私たちに思い出させてくれたことに感謝したい。